
最終回

絵爾久万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最終回

【Nコード】

N5051B

【作者名】

絵爾久万

【あらすじ】

恋人と映画を観にいくサヤカ。幸せなはずなのに涙が止まらない。結末がわかってから・・・。

仕事を終え、エレベーターで1階に下りていくと、ロビーでアキラが待っていた。

アキラは私に気づくと、吸いかけのタバコを足元に投げ捨て、靴底でもみ消した。

「早かったね」

「だめじゃん」

私はタバコの吸殻を拾って、吸殻入れへ捨てた。

夜の街へ出ると、闇に紛れていた天使が出てきて、マジック・ワンドで一振りした。

通りの街路樹はいつせいにライトアップされ、まるで私たちが歩く道を明るく照らしてくれているようだ。

私はアキラとふたり、流れる光の中を手をつないで歩いた。吐く息が白くなる。アキラと二人だと、肌を突き刺す冷たい風さえ心地いい。

「今からだ、最終回になるね」

「映画終わったら、何か温かいもの食べて帰ろう」

「お店開いてないよ」

「そっか……」

「今夜はうち来る？」

「うん」

「じゃ、帰ったら美味しいもの作ってあげる」

「うん……。あっ！」

アキラが突然立ち止まり、空を仰いだ。
私も上を向く。

「雪?・・・」

白いものが舞い降りてくる。

「うん」

冷たい雪の欠片が頬に落ちてきた。

アキラは両手を広げ、クルクル周って大きく口を開ける。

「俺の周りの雪、全部受け止めてやる」

「あはは、やめなよ。バツカみたい・・・」

アキラはやめない。まるで子供のよう。

「先に行っちゃうよ！」

私はアキラを残して早足で歩きはじめた。

後ろを振り向くと、アキラは懲りずにまだやっている。

「アキラー!!」

私は大声で叫んだ。

あまり大きな声を出したので、周りの通行人が不思議そうな顔で私を見た。

私は恥かしくなって、アキラを置いて逃げるように映画館の方向へ歩いた。目の前の信号が赤に変わった。

後ろからアキラが駆けてくる。振り向かなくてもアキラの足音だ
ってわかる。

「待つてよう！」

アキラが私の肩に肩をぶつけ、息を切らして言った。

「冷たいなあ……。サヤカ」

「バカッ！はずかしいよ」

私が下を向くと、アキラは突然私の肩を抱きしめ、キスをした。雪のように冷たい唇。

隣りで信号待ちをしていたサラリーマンが、ジロジロこっちを見てる。私は見せ付けるように、思いっきりアキラを抱きしめた。

信号が青に変わった。

「まだ、間に合うよ」

歩き出そうとする私を、強く引きとめてアキラが言った。

「あはは……」

交差点でディープ・キッス！

アキラの体温が、絡み合った舌を通じて私の口の中に伝わる。私の身体は温かくなった。

信号が黄色から赤へ、そして、また青から赤へ……

いくつ見過ごしたのだろう。青信号。

二人はお互いを見て笑い出した。頭に白い雪が積もっていた。

私たちは肩を寄せ合い、早足で映画館まで歩きはじめた。

いつものように通路側の前から3番目の席を取り、ふたり並んで座った。

「飲み物買ってくる。何か欲しいものある？」

アキラが言った。

「ホット・コーヒーと、いつものヤツね」

「オツケー。キャラメルポップコーンね」

「うん」

私はアキラの席にバッグを置いた。週末の映画館は混んでいた。カップルばかり。

私たちのように。

私とアキラのように・・・。

「本日は大変混みあっております。お手荷物は膝の上に載せ、詰めてお座り頂けますか？」

映画館の係員が私に言った。

「来るんです。この席・・・」

私はちよつとムツとした。目の前にいる感じの悪い係員にも、いつまでも帰ってこないアキラにも。後ろを振り返ったが、アキラの姿はみえない。またタバコでも吸っているのかな。

上映開始のベルが鳴った。

照明がだんだんと消されていく・・・。

コマーシャルの映像が流れる。

足音が聞こえた。私はもう振り向かない。だってこの足音は、アキラだってわかるから。

私が隣りの席からバッグを取ると、アキラはそこへタイミングよく腰掛けた。

「混んでて買えなかったよ」

そして、いつものように私の手を握った。アキラの手は温かい。

館内の照明がすべて消え、映画が始まった。

暗黒時代のイギリスを舞台に、禁断の恋に落ちたトリスタンとイゾルデ。

コーンウォールの領主マークに育てられた騎士トリスタンは、戦いの末重傷を負い、敵国アイルランドに流れ着く。

アイルランド王の娘イゾルデから献身的な介護を受けたトリスタンは、やがて彼女と恋に落ちるが、イゾルデはトリスタンの命の恩人マークと政略結婚することになる。

トリスタンは目の前で、領主マークと最愛のイゾルデの抱き合う姿を見なければならぬ。

イゾルデは最愛のトリスタンの前でマークに抱かなければならぬ。

ついに、愛よりも忠誠を選び、マークのために命を落とすトリスタン。トリスタンにすがりつくイゾルデ。

どんなに深く愛し合っても、決して結ばれない悲しい結末。

どんなに愛しても掴めない。

どんなに愛しても声も聞けない。手も握れない。温もりを感じることができない。まるで異次元に迷い込んでしまったみたいにな。

涙が溢れ出した。エンド・ロールが流れても席を立てない。私はバッグからハンカチを取り出し、涙を拭いた。

涙が止まらない。どんどん流れていく。身体中の水分が、全て涙になって流れ出ていくようだ。

エンド・ロールは流れていく。

周囲の観客が、ぽつりぽつりと立ちあがり、ざわめき始める。

エンド・ロールの流れが停止した。私はハンカチで顔を覆った。

どのくらい、そうしていただろう。周囲の騒音が静まった。私は突然肩を叩かれた。

顔を覆っていたハンカチを取り、見上げると、明るい照明の下でさっきの係員が、無愛想に言った。

「お客様、閉館です・・・」

私は立ち上がった。

ひとりで・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5051b/>

最終回

2011年1月8日21時59分発行